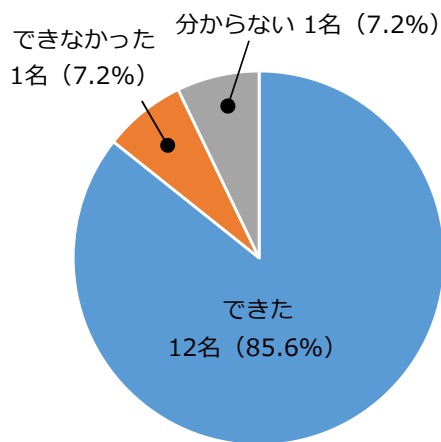


とりまとめ

目的	退所者に対し、入所中の意見表明を支援する仕組みや退所後のアフターケアについての意見を聴取し、その支援のあり方を検討するもの
対象者	平成30年度から令和2年度までの3年間に退所した36名のうち、連絡先等が特定できた31名
調査方法	アンケート用紙の送付又は電話や面会によるヒアリング
調査結果	14名（45.2%、アンケート回答3名・電話や面会によるヒアリング回答11名） ① 男女比 男性（10名）・女性（4名） ② 年齢 14歳（1名）・15歳（1名）・16歳（3名）・17歳（6名）・18歳（1名）・19歳（2名） ③ 所属 中学生（2名）・高校1年生（2名）・高校2年生（5名）・高校3年生（1名）・アルバイトを含む社会人（4名） ④ 住居 親の家（8名）・友人の家（1名）・会社や学校の寮（2名）・児童養護施設等（3名）

入所中の意見表明について

学園職員に自分の意見や気持ちを伝えることができたか



できた理由

- ・ 相談しやすかったから
- ・ 職員を信頼していたから
- ・ よく話を聞いてくれたから
- ・ 話や悩みを優しく丁寧に聞いてくれたから
- ・ 自分の成長を見守ってくれたから
- ・ 失敗しても支えてくれたから
- ・ とことん向き合ってくれたから
- ・ 職員と互いに思っていることを話し合うことができたから

できなかった理由

- ・ 困り事がなかったから
- ・ 自分のことを話すことがなかったから
- ・ 伝えても変わらないと思っていたから

分からない

意見表明による気持ちの変化

- ・ 色々な先生と話せるようになり、学園生活が楽しくなった
- ・ 自分に素直になれた
- ・ 職員に安心感を持つことができ、生活しやすくなった

意見表明時の心配や不安等

- 自分の気持ちを伝えたことで、
 - ・ 他児に告げ口として伝わってしまうかもしれないと心配になった
 - ・ 職員が自分のいないところで自分のことをどのように思っているかと不安になった
- 他児と居室を共有しており、また居室のドアがガラス張りのため、
 - ・ 他児が入室することが多く、話が途切れてしまうことが多かった
 - ・ ドア越しに職員と話している様子を見られた
 - ・ 聞き耳を立てられた
 - ・ 何を話しているのかと詮索された
 - ・ 他児が自分のことを報告しているのではないかと心配になった
- 自分の気持ちを伝えても、
 - ・ 職員が行動してくれるか心配だった
 - ・ 生活に変化がなく、自分の気持ちを伝えても意味がないと諦めた

意見表明に必要なサポートや仕組み

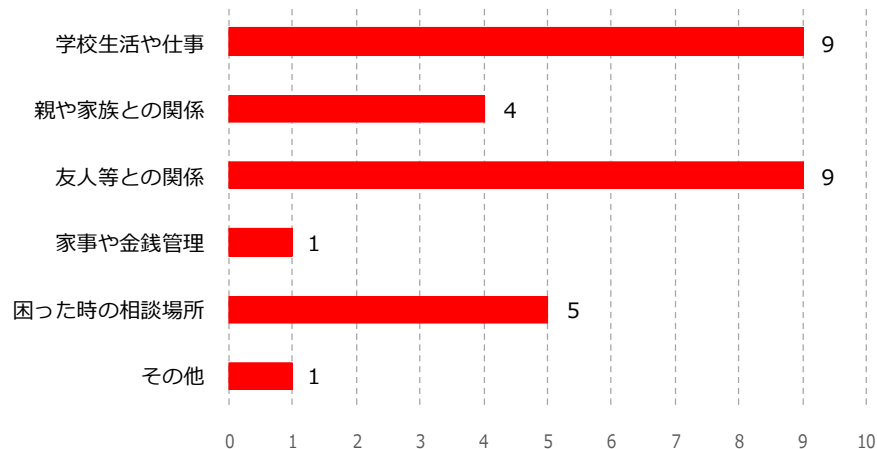
- 職員の姿勢
 - ・ 子どもに向き合う熱意
 - ・ 子どもの意見を素直に聞く姿勢
- 職員との会話時間の確保
 - ・ 自由時間等を利用した職員との1対1の会話
 - ・ 食器洗い等、日課中の何気ない会話
 - ・ 定期的な面接（全児童に面接実施の意向や話したい職員を確認のうえ実施・月1回）
- 学園職員以外の大人への意見表明の機会確保
 - ・ 個別支援の実施方法の適否
 - ・ 学園生活や他児との関係性等の愚痴や不満
- よりよい学園生活をつくるために職員と児童と一緒に話し合う場の設定
 - ・ 各寮1名の代表児童を選出し、職員と一緒に生活ルール等を改善する
 - ・ 子どもも含めた寮会（週1回）を実施する

とりまとめ

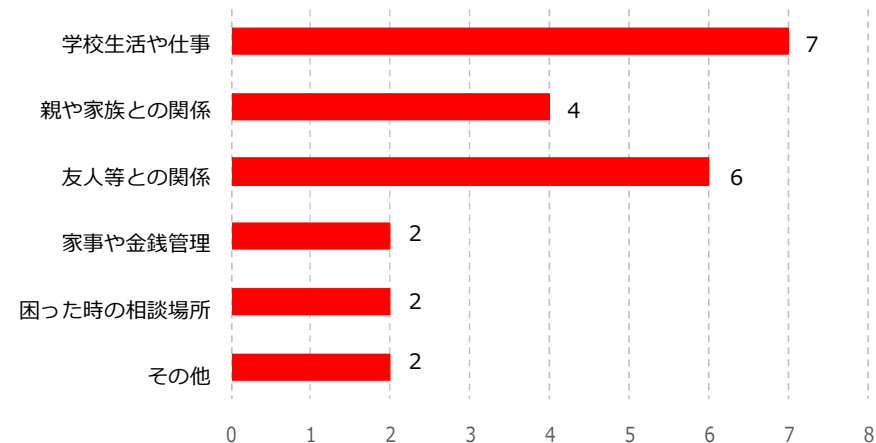
退所後のアフターケアについて

退所前後の心配や不安（複数回答）

退所前

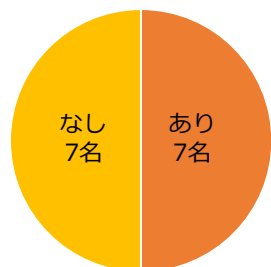


退所後



中学校卒業後の学園内での継続的な支援

中学校卒業後の継続入所の必要性

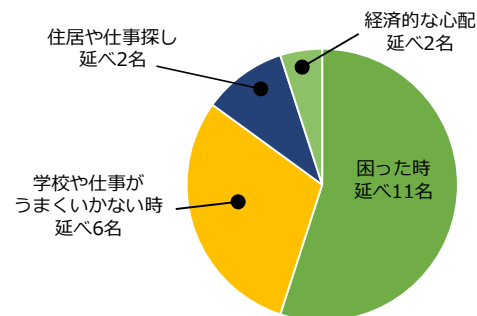


ありの理由

- ・ 学園職員が児童相談所と密に連携している様子を見て、高校に通学しながら学園職員と施設入所の背景にある生育歴を振り返り、家庭復帰の方法を考えたかった
- ・ 中学3年生時に入所すると入所期間が短期間のため、自立支援が完了しないと思った
- ・ 学園職員と離れることへの寂しさや新しい環境への不安があった
- ・ 家族関係の不和、高校での勉強、地域の友人関係の復活、相談相手の不在等の不安や心配があった

定期的かつタイムリーなアフターケア（複数回答）

サポートが必要な場面



具体的方法

- ・ 退所直前に学園職員と話すことができる機会を設けて欲しい
- ・ 学園内外での定期的（月1~2回程度）の面会や電話連絡